

対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける 類型の安定性について

清水健司（信州大学 人文学部 人間情報学科）

岡村寿代（兵庫教育大学大学院 健康・臨床教育学系）

川邊浩史（西九州大学短期大学部 幼児保育学科）

The Stability of Types in Terms of Two Dimension Model of Social Phobic Tendency and Narcissistic Personality

Kenji SHIMIZU (Shinshu University)

Hisayo OKAMURA (Hyogo University of Teacher Education)

Hirofumi KAWABE (Nishikyushu University Junior College)

Key words: social phobic tendency（対人恐怖心性）, narcissistic personality（自己愛傾向）, stability（安定性）

要約

本研究の目的は、対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルの各類型に対して安定性の検討を行うことである。そのため、一般大学生335名を調査協力者として、2時点による縦断調査を実施した。まず、Time 1で類型判別尺度（TSNS-S）と心理的ストレス反応尺度（SRS）に回答を求め、10週間後のTime 2で類型判別尺度、心理的ストレス反応尺度、日常生活ストレス尺度（STR）に回答を求めた。

分析の結果、Time 1時点の類型を基準とした全群において、全体の約半数がTime 2時点でも同じ類型を維持していた。また、環境的要因である心理的ストレス反応の変化量や日常生活ストレスは、類型を変化させるような影響力を示さなかった。これは、2次元モデルにおいて2軸を構成する対人恐怖心性と自己愛傾向が、安定したパーソナリティ特性指標であるためだと解釈された。

【問題】

“対人恐怖”とは、自分が恥ずかしい思いをするかもしれない社会的状況にて強い不安を

感じ、当該の苦手場面から回避しようとする特徴を持つ。これは、他者への恐れや羞恥感情への敏感さとも深く関連しており、青年期において顕在化しやすい構成概念である。また、「自己愛」とは「自分が自分自身を愛すること」と表現されるように、自信や優越感という自己の肯定的感覚を維持したい欲求を指し示す。これは、ポジティブな自己概念を保とうとする機能を持つ一方で、誇大性・賞賛欲求・注目願望などの必ずしも適応的とは言えない側面を含む複雑な構成概念である。

近年では、この両概念について臨床的観点からサブタイプが存在が示唆されるようになった。まず、対人恐怖では、羞恥感情への敏感さを悩みの主題とする消極・弱力的な「単純型対人恐怖症」と、羞恥感情に対する敏感さと傷つきやすい自己愛を併せ持ち、負けず嫌い・完全主義的な「平均的対人恐怖症」の2タイプ（鍋田，2007）が提示されている。一方、自己愛では、誇大的で他者評価に鈍感な「無関心型」と、誇大的でありながらも他者評価に敏感な「過敏型」の2タイプ（Gabbard, 1994 館監訳 1997）が提示されている。

その中で清水・川邊・海塚（2007）は、この両概念における各サブタイプの整理を行い、各々に対応すると考えられたアナログ類型を配置する対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル（以下、2次元モデル）を作成した。これは、対人恐怖と自己愛の関係を「恥に対する敏感さ」と「自己顕示欲の強さ」の2変数から捉える岡野（1998）モデルを援用したもので、一般青年を対象とした実証モデルである。このモデルでは、横軸に対人恐怖心性（過敏特性次元）が、縦軸に自己愛傾向（誇大特性次元）が布置されており、各2軸得点の高低から5類型を分類するものである。このように、2次元モデルは実証的観点から対人恐怖と自己愛の関連性を捉え、対人恐怖と自己愛の各臨床サブタイプに対応したアナログ類型を抽出可能とした点に一定の意義が見出されている（清水・川邊・海塚，2008）。

この5類型のうち、ともに強い対人恐怖心性を示す過敏特性優位型・誇大-過敏特性両向型では、自意識や適応指標のバランスの悪さ（清水他，2007）、ストレス刺激に対する脆弱性（清水他，2008）などの不適応像が共通点として報告されている。また、清水・岡村（2010）は過敏特性優位型における不安への防衛方略が回避的であるのに対し、誇大-過敏特性両向型は強迫的であるとして、両類型の相違点に着目した指摘を行っている。このように、2次元モデルの各類型特性に関する報告は数を増やしつつあり、実在人間像の輪郭を明確にするような知見の蓄積がなされている。

しかし、類型特性に関する知見が拡充を見せる一方で、類型自体の安定性には未だに言及がなされていない。これでは、2次元モデルの類型における安定性もしくは変動性に課題を残すことになり、類型そのものの基本的な扱い方にも大きな影響を及ぼすことになる。

これまでの臨床的見解では、自己愛における「過敏型」と「無関心型」は個々の純粋なタイプでも存在しうるが、多くは両者が混合した様相を呈する（Gabbard, 1994 館監訳 1997）とされている。また、対人恐怖でも、背景に自己愛を併せ持つタイプと羞恥感情に対する敏感さのみを主題とするタイプの明確な識別は困難（鍋田，2003）であるとされている。このように、自己愛および対人恐怖ではサブタイプに関する一定の記述がなされているものの、分類自体の安定性や変動性には直接的な回答を持たない。また、仮に分類が変動するとしても、それは元来変動しやすい素因の要因を持つためなのか、それともストレス刺激などの環境的要因によるものなのかという点にも疑問が及ぶところである。これは、2次元モデ

ルのような実証モデルにおいても同様の検討課題となってくる。従って、まず2次元モデルの類型は安定したものなのか否かという点、次に安定するにしても変動するにしても、それを規定するのは素因的要因か環境的要因かという点、以上の2点に関連した実証的検討が必要になると思われる。

そこで、本研究では同一の調査協力者に対して2度の回答を求める縦断調査（Time 1 から Time 2 の期間は10週間）を行い、一定のストレス状況を加味した上で2次元モデルの類型維持・変化について検討する。

【方法】

本調査で使用した測定尺度

1. 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度短縮版（以下、TSNS-S）

清水他（2008）による類型判別尺度を使用し、20項目について“全然当てはまらない”～“非常に当てはまる”の7段階で評定を求めた（10項目による対人恐怖心性領域—ex. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない、10項目による自己愛傾向領域—ex. 私は才能に恵まれた人間であると思う）。なお、類型判別については清水他（2008）の基準に従って実施する。

2. 大学生用日常生活ストレス尺度（以下、STR）

嶋（1999）によるものを使用し、23項目について「最近3ヶ月ほどの間に経験した日常苛立ち事」を回顧的に“経験しない・感じない”～“とても気になった”の5段階で評定を求めた（ex. 他人から失望させられたこと、試験勉強の大変さ）。なお、教示において「3ヶ月ほど」という期間を設定したのは、Time 1 から Time 2 までの10週間に合わせるためである。

3. 心理的ストレス反応尺度（以下、SRS）

鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1998）によるものを使用し、18項目について“全くちがう”～“その通りだ”の4段階で評定を求めた（ex. 気持ちが沈んでいる、イライラする）。

調査協力者は Time 1 と Time 2 の両時点データがそろったH県内の大学生335名（男性：172名、女性：163名）で、平均年齢は19.3歳（ $SD=1.38$ 歳）であった。大学の授業時間の一部を使用させてもらい、X年2月初旬（Time 1）にてTSNS-S・SRSの2測定尺度に回答を求め、続いてX年4月中旬（Time 2）にてTSNS-S・SRS・STRの3測定尺度に回答を求めた。また、この期間内には後期試験および進級判定が含まれていたため、当該の大学生は一定のストレス状況下に置かれていたものと推測された。

【結果】

まず、各測定尺度における信頼性の検討を行った。TSNS-Sの α 係数は、対人恐怖心性領域において.82、.83を示し、自己愛傾向領域において.80、.80を示した（各々 Time 1,

Time 2 の順)。また、STR の全項目における α 係数は.88を示し、SRS の全項目における α 係数は.94、.92を示した (Time 1, Time 2 の順)。このように、各尺度において一定の内的整合性が確認されたため、以下の分析には全測定尺度を用いることとした。

本研究における類型維持・変化の取り扱い方は、まず Time 1 時点における類型を基準として、Time 2 時点でも同じ類型であった場合を維持とし、Time 2 時点で異なるいずれかの類型であった場合を変化とした。そして、類型維持・変化における人数比率の偏りについて検討するため、Time 1 時点での類型を基準とした 5 群ごとに χ^2 検定を実施した。その結果、Time 1 にて過敏特性優位型であった群 ($\chi^2(3)=98.3$ $p<.05$)、Time 1 にて誇大-過敏特性両向型であった群 ($\chi^2(4)=30.2$ $p<.05$)、Time 1 にて誇大特性優位型であった群 ($\chi^2(4)=60.6$ $p<.05$)、Time 1 にて誇大-過敏特性両貧型であった群 ($\chi^2(4)=43.8$ $p<.05$)、Time 1 にて中間型であった群 ($\chi^2(4)=33.0$ $p<.05$) の全群において人数比率に有意な偏りが見られた。Table 1 にて、各群の実測度数、人数比率および残差を示した。

Table 1 Time 1 時点の類型を基準とした各群の Time 2 にかけての類型維持・変化の比率

Time 1 時点の類型→ Time 2 時点の類型↓	過敏特性 優位型	誇大-過敏 特性両向型	誇大特性 優位型	誇大-過敏 特性両貧型	中間型
過敏特性優位型	60 (72.3%) 39.3△	11 (16.7%) -2.2▼	1 (1.5%) -12.8▼	8 (13.6%) -3.8▼	10 (17.2%) -1.6
誇大-過敏特性両向型	9 (10.8%) -11.8▼	30 (45.4%) 16.8△	4 (5.8%) -9.8▼	4 (6.8%) -7.8▼	10 (17.2%) -1.6
誇大特性優位型	0 (0%) -	13 (19.7%) -0.2	38 (55.0%) 24.2△	9 (15.2%) -2.8▼	5 (8.6%) -6.6▼
誇大-過敏特性両貧型	9 (10.8%) -11.8▼	5 (7.6%) -8.2▼	14 (20.3%) -0.2	32 (54.2%) 20.2△	5 (8.6%) -6.6▼
中間型	5 (6.1%) -15.8▼	7 (10.6%) -6.2▼	12 (17.4%) -1.8	6 (10.2%) -5.8▼	28 (48.4%) 16.4△
合計	83 (100%)	66 (100%)	69 (100%)	59 (100%)	58 (100%)

上段は実測度数 (人) と人数比率を示し、下段は残差を示す

△は期待度数より有意 ($p<.05$) に大きく、▼は期待度数より有意 ($p<.05$) に小さいことを示す

さらに、Time 1 から Time 2 にかけての類型維持・変化の全体的様相を Figure 1 にまとめた。

そして、次に心理的ストレス反応や日常生活ストレスなどの環境的要因が類型維持・変化に及ぼす影響について検討を行った。まず、Time 1 時点における類型を基準とした各 5 類型において、独立変数を心理的ストレス反応の変化量 (Time 2 の SRS 得点から Time 1 の SRS 得点を引いた値) と日常生活ストレスとし、従属変数を対人恐怖心性の変化量と自己愛傾向の変化量 (ともに Time 2 得点から Time 1 得点を引いた値) の各々とした重回帰分析を行った。各群における分析結果を Table 2 に示した。

20% 以上の自由度調整済み決定係数 (adjusted-R²) を示したのもののみに着目すると、

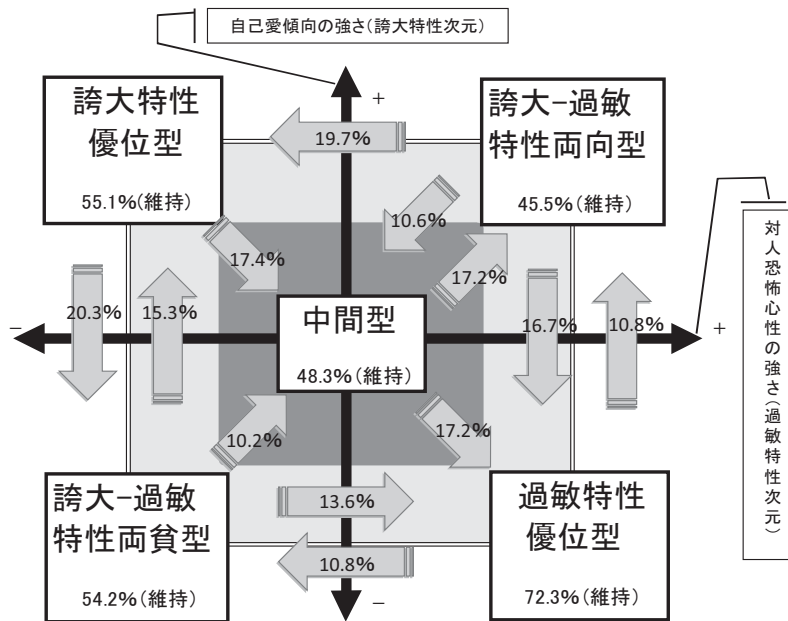


Figure 1. 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける類型維持・変化の全体的様相
 注) 類型変化が10% 以下のものは、人数が小数になるため割愛した。

Table 2 SRS 変化量, STR から予測した対人恐怖心性, 自己愛傾向の変化量

Time 1 時点 での類型	過敏特性優位型		誇大-過敏特性両向型		誇大特性優位型	
	対人恐怖	自己愛	対人恐怖	自己愛	対人恐怖	自己愛
SRS 変化量	.44 *	-.29 *	.26	.13	.19	.04
STR	.25 *	.05	-.20	.11	.24 *	.08
F-value	15.85 *	3.55 *	2.99	1.18	3.86 *	0.27
adjusted-R ²	.26	.06	.06	.01	.08	.01

Time 1 時点 での類型	誇大-過敏特性両貧型		中間型	
	対人恐怖	自己愛	対人恐怖	自己愛
SRS 変化量	.25 *	.17	.10	-.03
STR	.38 *	.22	.09	.04
F-value	10.16 *	2.87	.66	.03
adjusted-R ²	.24	.06	.02	.01

Time 1 時点にて過敏特性優位型であった群において、SRS 変化量と STR が対人恐怖心性の変化量に対して正の標準偏回帰係数を示した。これは、この群において心理的ストレス反応の増加と強いストレスという環境的要因が、対人恐怖心性を増加させることを示唆している。また、Time 1 時点にて誇大-過敏特性両貧型であった群において、SRS 変化量と

STR が対人恐怖心性の変化量に対して正の標準偏回帰係数を示した。これは、この群において心理的ストレス反応の増加と強いストレスラーという環境的要因が、対人恐怖心性を増加させることを示唆している。

【考察】

Table 1 が示すように、大学生にとって一定のストレス状況下にあると推測された期間(10週間)では、Time 1 時点での類型を基準とした全群において有意な人数比率の偏りが見られた。全群に共通することとしては、類型が維持された場合にのみ一貫してプラスの残差が示され、類型が変化した場合では概ねマイナスの残差が示されたことが挙げられる。これは、2次元モデルの類型が安定性を持つことを支持する結果であると言える。また、環境的要因からの影響による類型維持・変化の可能性については、過敏特性優位型にて以前よりも強いストレス刺激に曝された場合に対人恐怖心性が強まり、結果として類型を維持させる要因として作用することが示唆された。また、誇大-過敏特性両質型では、以前よりも強いストレス刺激に曝された場合に対人恐怖心性が強まり、誇大-過敏特性両質型から中間型もしくは過敏特性優位型に移行しやすい傾向が示唆された。

これらの結果をまとめた Figure 1 の全体的様相を大局的に解釈するならば、基本的に各類型は維持される様相が強く、ストレス反応の増悪や強いストレスラーなどに見られるネガティブな環境的要因の変化にしても、類型変化をもたらすほどの影響力を持つとは言い難いことが見て取れる。そのため、2次元モデルの類型は安定性を持っており、大学生の日常生活範囲内にて経験される苛立ち事や精神的健康の低下では、類型変化を生じさせる規定要因とはなり得ないことが考えられる。

臨床的見解における対人恐怖と自己愛のサブタイプの捉え方では、分類の安定性に曖昧さが残されていた(鍋田, 2003; Gabbard, 1994 館監訳)。しかし、少なくとも一般青年を対象とした2次元モデルの5類型では安定した固定的様相を持つことが示唆された。これは、2次元モデルの横軸と縦軸を構成する対人恐怖心性と自己愛傾向自体が、安定性・持続性の高いパーソナリティ特性指標であるためだと考えられる。ただし、本研究はストレス状況に関して一定の配慮を行っているものの、あくまで大学生の日常生活を対象とした2時点サンプルであり、縦断調査の期間が10週間という短期間であったことに限界を有する。従って、個人が日常的なストレスラーの範囲を超えた強い精神的ショックを経験した場合、あるいは個人が長い時間をかけて精神的な成熟を遂げた場合には、類型が変化する可能性もあることに留意が必要だと思われる。

【引用文献】

- Gabbard, G.O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.
(ギャバード, G.O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的臨床精神医学 その臨床実践 DSM-IV 版 臨床篇; II 軸障害 岩崎学術出版社)

- 鍋田恭孝 (2003). “ひきこもり” と不全型神経症 精神医学, **45**, 247-253.
- 鍋田恭孝 (2007). 思春期臨床の考え方・すすめ方 金剛出版
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 —対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版
- 嶋 信宏 (1999). 大学生用日常生活ストレスサー尺度の検討 中京大学社会学部紀要, **14**, 69-83.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**, 350-362.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討 —対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, **58**, 23-33.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1998). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29.

(2010年10月27日受理, 11月18日掲載承認)